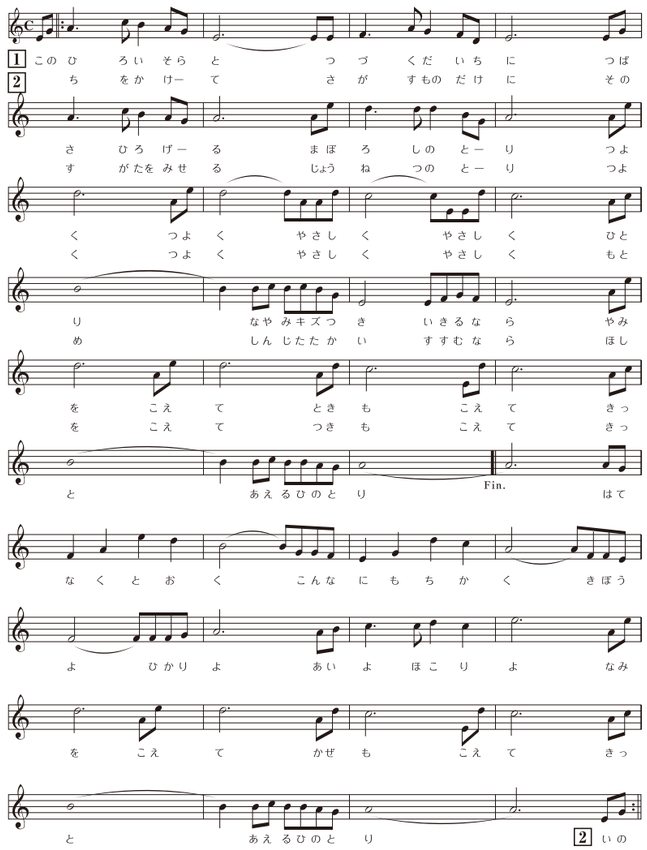
火の鳥

作詞 作曲 原田則子

1 この広い空と　つづく大地に
つばさ広げる　幻の鳥
強く　強く　やさしく　やさしく
一人　悩み　傷つき　生きるなら
闇をこえて　時もこえて
きっと　あえる　火の鳥

はてなく遠く　こんなにも近く
希望よ　光よ　愛よ　誇りよ
波をこえて　風もこえて
きっと　あえる　火の鳥

2 命をかけて　さがす者だけに
その姿をみせる　情熱の鳥
強く　強く　やさしく　やさしく
求め　信じ　戦い　進むなら
星をこえて　月もこえて
きっと　あえる　火の鳥



「星」と「月」は、かつら愛児園の年長クラスの、男の子（星）と、女の子（月）のクラス名です。
この歌は、彼ら、そしてすべての子供たちの為の応援歌です。

園児による演奏を配信中！　かつら愛児園ホームページ
http://www.katsura-aijien.com/

永林寺附属　かつら愛児園
創立60周年記念

かつら愛児園のこどもたちへ贈る

「原 坦山（はら たんざん）」と「火の鳥」

あなたの火の鳥はどこにいますか?

絵と文　かつら愛児園　園長　原田則子「火の鳥 The Firebird」

火の鳥

この世のどこかに、金翅鳥（こんじちょう）という火の鳥がいるという。
万物生類の王である。
どのような姿をしているかは誰も知らないが
龍を食べること、まるでミミズをついばむがごとく
虎をとらえること、カマキリをつかむがごとく、
また、天地はその翼を満たすにたりず
空界をゆうゆうと、ひとり飛ぶ。
また、その者、必ずしも大きいというわけではなく、
その小ささは、かえってはかり知れず、
ひとたび変身すれば、
蚊の眉毛に巣ごもるように小さく、
またある時は、蚤の腹の中に遊ぶというのである。
その存在ははかり知れず、妄想であるのか、狂気の沙汰であるのかもわからない。
西方の山の頂きにいて、
不老、また不滅である。
何人も近づくことができないが、
信力金剛のごとく、
身命を惜しまず、命をかけて探す者だけが
その真実を知ることができ、
火の鳥の姿を見ることができるのである。

原　坦山　額の漢詩の訳　原田則子

「再生　Rebirth」

原 坦山を辞書で引くと次のように書かれています。

> 原　坦山 (はら たんざん)
> 1819～1892年 幕末 明治期の禅僧、仏教学者、陸奥の人　幼名 良作。いみなは覚仙。
> 号は鶴巣。昌平黌（しょうへいこう）に学び又　医学も修めた。東大インド哲学科の初代教授。
> のち曹洞宗大学林総監。小田原　足柄の大雄山　最乗寺の住職も務めた。

かつら愛児園の第二プレイルームの壁にある大きな6つの額は、私の父、創立者の原田隆司（はらだたかし）前園長が先祖である原 坦山より受け継いだ書です。

36年ほど前、私の祖父、原田碩天（はらだせきてん）が、山梨に住職をしている寺に保管していたこの書を、亡くなる前に父に託してくれたことを私はよく覚えています。

それから父は、この書の修復をし、古い中国の漢詩を写したものであるこの書に何が書かれているのかを、仏教学者の方や近隣の寺の住職さんたちの協力のもと長い時間をかけ調べました。

なんと、そこに書かれていたのは、「火の鳥」について！
奇しくも私が幼き頃より、父から「こう生きよ」と学んできたことでした。
そしてそれは創立以来、かつら愛児園の保育の理念として目指してきたものでもあります。

60周年を迎えるにあたり、園の創立者である、わが父母、原田隆司、原田攝子（ママ先生）、そして祖父　原田碩天の、この書とかつら愛児園への思いとともに、皆様にこの書を紹介いたします。

又、私はこの書よりイメージを得て、歌と絵を作りました。
こどもたちが大きな声でこの歌を歌い、一生懸命　生き、自分の火の鳥を見つけてくれたら本当に幸せです。

父　創立者　原田隆司

60周年を祝い、感謝をこめて
2012年11月30日
かつら愛児園　園長 原田則子

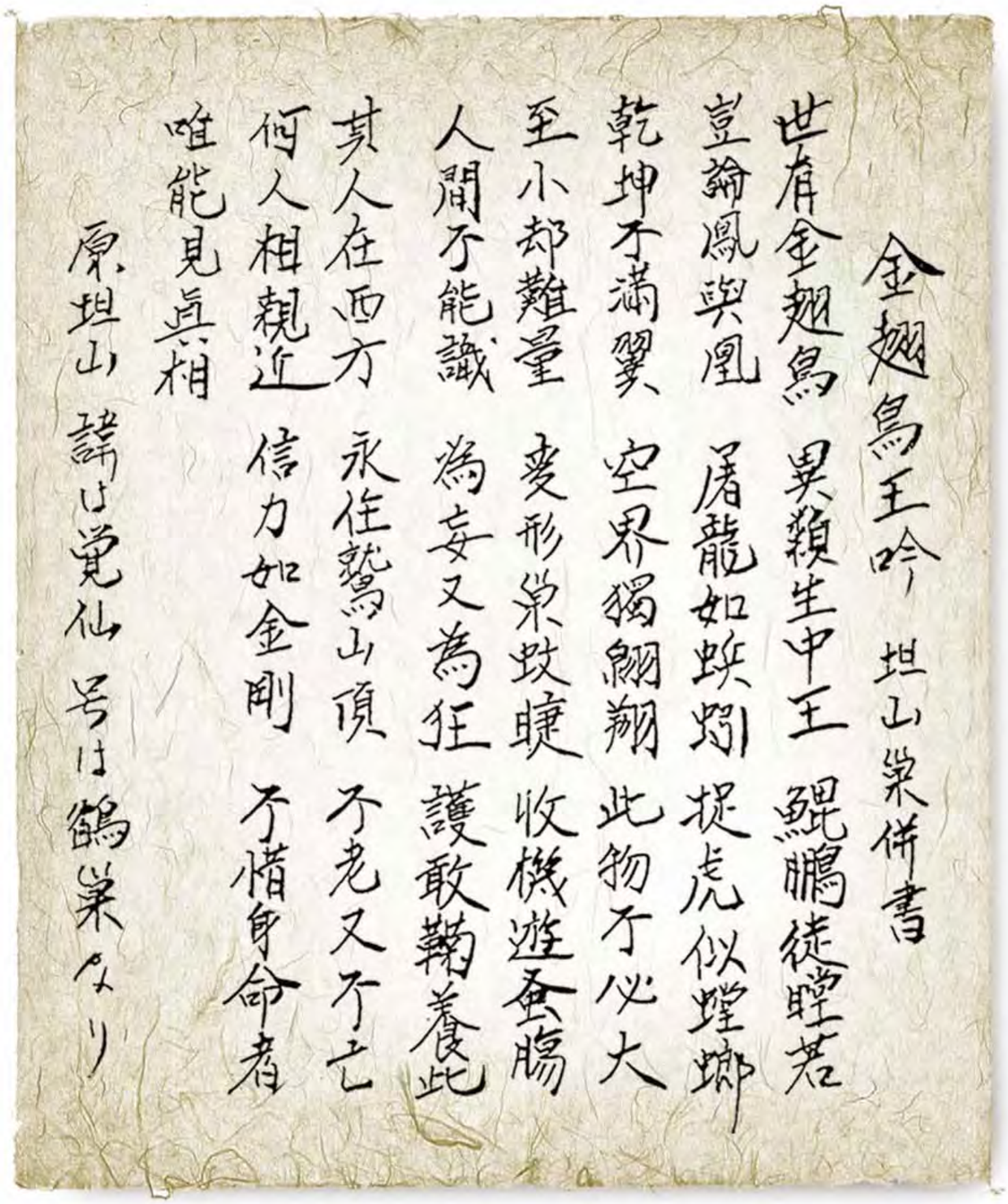
かつら愛児園の第二プレイルームにある原 坦山の書「金翅鳥を吟ず」

金翅鳥王を吟ず

世に金翅鳥あり
異類生中の王たり
鯤鵬 徒に瞠若 豈鳳と凰を論ぜん
龍を屠ふること 蚯蚓の如く
虎を捉うること 螳螂に似たり
乾坤翼を満さず
空界を獨り翺翔す
此の物必ずしも大ならず
至小却って量り難し、
形を変ずれば蚊の睫に巣ごもり
槖を収むれば蚤の腸に遊ぶ
人間識る能わず 妄たり又狂たり
護りて敢えて此れを鞠養す
其の人西方に在り
永らく鷲山頂に住す
不老又不亡 何人か相親近せん
信力金剛の如く
身命を惜しまざる者
唯能く真相を見ん
原担山 諱は覚仙 号は鶴巣なり

坦山 書の訳 原田隆司 記

坦山の書についての解読に大変なご尽力頂きました、
龍寶寺住職、故 團野弘之氏に深く感謝いたします。



金翅鳥王吟 坦山衆併書

世有金翅鳥 異類生中王 鯤鵬徒瞠若
豈論鳳與凰 屠龍如蚯蚓 捉虎似螳螂
乾坤不滿翼 空界獨翺翔 此物不必大
至小却難量 変形巣蚊睫 收槖遊蚤腸
人間不能識 為妄又為狂 護敢鞠養此
其人在西方 永住鷲山頂 不老又不亡
何人相親近 信力如金剛 不惜身命者
唯能見真相
原坦山 諱は覚仙 号は鶴巣なり

坦山 書「金翅鳥を吟ず」の漢詩を写したもの 原田隆司 記

金翅鳥

迦楼羅(カルラ)とよばれ、想像上の大鳥。翼は金色で口から火を吐き、龍を好んで食う。仏教の経典にも記され、仏法を守護し衆生を救うために梵天王が化したとされる。又、日本では天狗のことをさすともいわれる。

原 坦山とその弟子、原田玄龍は私の祖父にとって二人の祖父です。
原田玄龍の娘、せつ が原 坦山の養女となり、祖父、碩天が生まれたからです。
原 坦山と原田玄龍の研究をされていて、3年前、かつら愛児園を訪ねてくれた、
京都在住の吉永進一先生が紹介の文章を書いて下さったので、興味のある方は読んで下さい。

原田玄龍と

はら　たんざん

原 坦山

原田玄龍について語るには、その師匠である原坦山についてまず説明しておかなければならない。坦山は、曹洞宗の管長、曹洞宗大学の総監、東京大学印度哲学の初代講師を務めただけでなく、その学識と豪放磊落にして洒脱な人柄で、明治を代表する禅僧の一人というにふさわしい人物であった。

坦山は、文政2年（1819）平藩藩士、新井勇輔の息子として生まれる。幼名は良作という。地元で漢学を学んだ後、天保4年（1833）には江戸の昌平黌に入学してさらに学問を重ねた。天保11年（1840）には医学に転じ、多紀安叔（元堅）の門に入って医学を学んでいる。弘化元年（1844）当時、学者の卵は、曹洞宗の学校である栴檀林にいって、講義をする慣わしがあったという。そこで講義が通用すれば一人前だというのである。彼はそこで京璨という僧侶と議論になり、論争に負けたほうは勝ったほうに弟子入りすることとして、論争を始めた。しかし、彼は議論に負け、いさぎよく僧侶になることになった。これが禅僧としての出発点である。年をとってからの出家のため、僧侶としての作法を知らず、いろいろと失敗もあったという。しかし、修行については真剣で、興聖寺の廻天 、大阪の風外本高などに就いて厳しい修行を重ねたという。北白川の心性寺の住職を任せられ、尼僧で歌人の太田垣蓮月が寺に寄寓していた時期もある。関白二条公と会話の折に衝突し、岩倉の癲狂院に入れられた後、文久2年 (1862)関東にもどされ、結城、長徳院の住職などを務めた。

一方、京都在住の際に、小森宗二という蘭学医と論争になり、議論に負けている。ここでも坦山はいさぎよく、仏教の生理学が間違っていることを認め、蘭方医学を熱心に学び始めた。心は胸にはなく脳にあること、真理は実験によって証明されるべきことなど、医学と科学の知識や理論を取り入れ、幕末から明治初めにかけて「無明論」「脳脊異体論」「惑病同源論」や『心性実験録』などの生理学的な仏教説を発表している。

彼の説によれば、人間の体は「陀那」という粘液が腰のあたりから生じて頭を経由して循環している。これは心身の病気の原因となる悪役でもあり、生命エネルギーでもある。心は脳にあり、それ自体は清浄なものであるが、脊髄を通じてのぼってきた陀那と合体して和合識というものになる。つまり心は汚されたものとなっているのが普通である。この和合識が腹へ流れると唯識でいう第六識（意識）であり、胸へ流れると第七識（末那識）となる。和合識が体を循環している限りは健康であるが、いったん停滞すればそこで煩悶が生じ、身体に病をもたらす。坦山は、この陀那が上がってくる流れを大脳へ入る前に阻止すれば、心は本来の清浄なものにもどって悟りを得るだけでなく、身体は完全な健康を得ることになる。坦山の禅の方法では、こうした陀那の流れをイメージして、体に力をこめてその流れを阻止することになるが、彼は自分の身体でそれを試して成功した、つまり実験を根拠に正しいと主張していた。この禅を広めるために、坦山は明治10年代に仏仙社という、俗人への禅の普及を目指した団体を結成している。

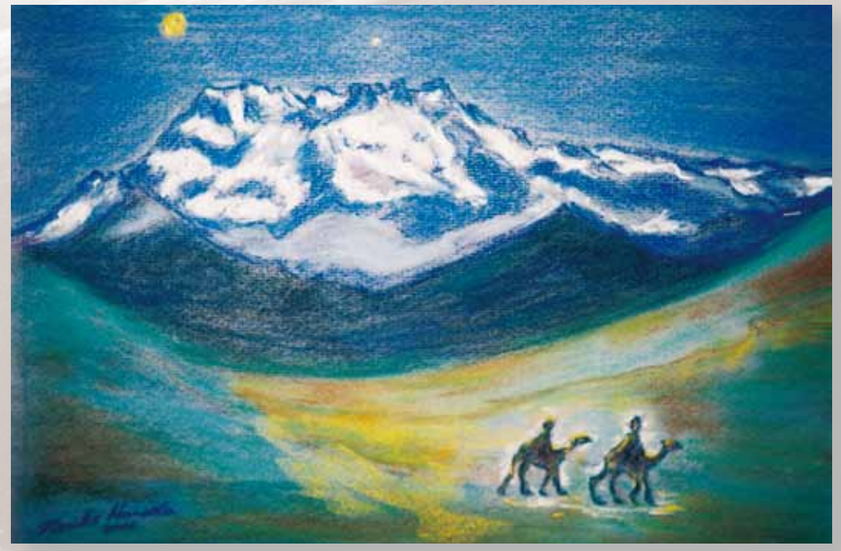
維新後は、大教院という国の機関の編輯課に入ったが、職務上の些細な事件で僧籍剥奪されている。それでも彼の学識は高く評価されていたようで、西本願寺法主明如（大谷光尊）に講義しており、明治12年（1879）には東京大学で講師となって、仏書購読を担当し大乗起信論などを講義している。そのために、宗門もあわてて彼に僧籍をもどし、小田原最乗寺の住職に任じている。明治24年（1891）には曹洞宗大学総監、明治25年（1892）には短期間ではあるが曹洞宗の管長も勤めている。

坦山の法をついだのは原田玄龍である。彼は天保８年（1837年）8月15日に、茨城県結城郡上山川村大字上山川にて、有倉久兵衛の次男として生まれている。慶応3年9月より坦山のもとで座禅を修行していたが、明治2年（1869年）6月7日、首厳経の講義を聴いていた際に、観音耳根円通の巻でひらめく、耳根に定力を用いて、胸腹にもっていったところ、たいへんうまくいき、喜びのあまり一週間眠れなかったという。その後で胸腹に定力を用いた、以後、健康であり精神の不安が消えた。「身体益々壮健且つ逆境界に逢うも怖畏の念なく恒に大安楽の地に住す」。確かに健康であったようで、昭和4年（1929年）10月1日、90歳の高齢で亡くなっている。

なお、玄龍は、この方法を耳根円通法と呼んだが、坦山が腹、胸、脳という順で定力を加えたのに対し、玄龍はその逆に脳から腹へという方向を取った点が最大の違いであり、その方法は曹洞宗には残らなかったが、一部の霊術家たちに実践された。

玄龍の長女、せつ（明治 10年（1878年）、4 月 8 日生まれ）は、原坦山の養女となり、明治24 年 6 月 24 日、養子、八十八と結婚、長男　碩天　が生まれる。

2012年9月2日
舞鶴工業高等専門学校 准教授
吉永 進一



「国境を越えて　Cross the border」